輪読会、壁新聞、夜間の教育、生産者大会、その他
朝晩の作業出発・帰りに革命歌、反動分子のつるし
上げなど。

十 戦争ほどむだなことはない。消耗のみにて生産なし。彼我ともども、どれほどの血が流されたであろう。いわれなき抑留もなかつたであらうに。孫子いわく「兵ハ国ノ大事ニシテ、死生ノ地、存亡ノ道ナリ、察セザルベカラズ」とか。為政者たる者のよくよく肝に銘ずるべき言葉ではなからうか。

船は静かに岸壁に近づく。あれほど待ち焦がれた日本の土をもうすぐ踏むことができるのだ。「お帰りなさい、ご苦労さまでした」。棧橋で手を振り出迎えてくれる人々の声が何だか面映い。お互いに敗戦国民である。大手を振って出迎えられる身ではないのに、と濟まない気がする。米軍に占領された日本がどのように変わっているだろう、父母よ、兄弟よ、我が友よ、皆元気でいるだろうか、万感もごもの思いを秘め、一歩一歩タラップを降りる。あと三步、二歩、一歩。ついに踏むことができた故郷

の大地。舞鶴に上陸。やっと帰ってきたぞ、日本。これからどんな生活が待ち受けているやら。時、昭和二十四年十月三日、秋もようやく深まらんとするころ復員である。

苦汁をなめたエラブカの収容所

滋賀県 寺村 芳郎

昭和二十一年十月上旬、モスクワに近いタンポフという帝政時代の町で、電話線の埋設工事を約一カ月で終え、一息ついたとき突然出発命令。うわさは当然今度こそタモイ東京と流れ、半信半疑で上下二段の有蓋車に積み込まれ、お互い祖国に着いたら一番に口にするのは何だとか、米兵の占領状況はどうだろうかなど、空をつかむ話ばかり。やっと出発して二日目に駅でもないところで停車、しばらくすると全員下車の命、まだまされたか、ふんまんやる方なく、重い足取りで行軍について行く。二日目の夜は雨で皆濡れネズミ。

夜明け前戦友が畑からかすめてきたニンジン一本をもらい、泥を衣服で落とし、かぶりつく。瞬時の安らぎ、この味は生涯忘れることはない。昼ごろになり右足首がはれ出した。それは四日ほど前から靴ずれを起こし戦友から借りた地下足袋で行軍を続けていたが、夕方やっと目的地に着き、早速裸にされ身体検査（収容所が変わることにソ連の女軍医）、足のはれを見て入院を命ぜられる。入院といっても病院ではなく一般宿舎の一部を病室に見立てたもので、ベッドらしきもので一人寝ができ、便所は、今までの収容所では屋外で幅二十センチ余り、長さ十五、六メートルの溝を三、四列掘り、縦に並んで用を足すのであるが、この病院では、一部屋に一段高くした板に直径二十センチ弱の穴をあけ、横に五つ、すなわち五人が腰かけて用を済ませます。冬の寒さの中大いに助かった。

さて、足の傷は日に日に悪化、痛みは脈拍に準じてズキンズキン、寝ていても辛抱できず、丸棒三本で三脚をつくり、それに右足を体より上につるしてもらい幾分か楽になる。包帯交換は日に一度。一週間がたつ

たとき、ついに緑膿菌に進行、日本の青木軍医が診察して、「こりゃいかん、下手をするとアキレス腱を切らねばならぬ。ソ連に話して包帯交換は二回にしてもらおう」と言われ、傷口から真っ白い筋を見せられる。緑膿菌の臭気は部屋に充滿し、他の患者に大変な迷惑をかけたことです。

約一カ月の入院生活で傷口もふさがり、身体の疲労も随分とれ、退院後も約二十日は松葉づえに身をゆだねながら軽作業につき、小麦の乾燥に従事。内緒で小麦をいっては病人や戦友に分けて喜んでもらえたものつかの間、一般作業に復帰させられる。

このラーゲルこそ、ソ連人でさえ恐れられていたエラブカの町、囚人（特に思想犯の重罪人）の監獄であると聞き、それで先ほどかいま見た、ソ連人が五十人ずつ数珠つなぎ（片手片足を鎖でつないである）の一団がザーザーと連行されていたのかと、我々も最後の収容所に放り込まれたぞと観念せざるを得なかった。

主な作業はコルホーズで馬鈴薯掘り。一日のノルマは、横一列に並び幅二メートル、長さ百メートルの収

穫。午後三時になるとコルホーズ長（国営農場長）が馬で来て、みんなの掘り出した跡を馬の前足で無作為に掘り返し、芋が一つでも出てくるとスタートルラインに呼び戻され一からやり直し。検査が終わると麻袋に詰めて一カ所に集積し、一日のノルマ完了となる。

この収容所で一番つらく、みんなが一番嫌がったのは、約一週間ごとに回ってくるコンボイナヤロータ（ソ連警戒兵の宿舍の掃除と原木運び、また輪切りした木材のまき割り、ソ連兵の一日分の糧秣運搬）の作業であった。

昭和二十二年二月六日、一面雪野原、零下二五度を超える酷寒の日であった。三十名編成で二名の警戒兵に見守られ一キロ足らずの宿舍に着くと、二名が宿舍の掃除、糧秣受領、まき割り。主隊の二十八名は、そりを二台引つ張り、約二、三キロの所に倒されてある原木（直径五十〜六十センチ）を、四メートルの長さ二人引きノコギリで交代しては切り、そりに積めるだけ積んで帰り、その原木をさらに五十センチの輪切りにして、まさかりで割ってまきにする。

その日は残留の二人のうちの一人になった。十九歳の警戒兵は事ごとにあごで指図しこき使う。最初に取りがかったのは宿舍の中央廊下の掃除、幅約二メートル、奥行き十五、六メートルあり、両側は二段ベッドになっていて、非番の兵隊が七、八人上段にゴロゴロしていた。ほうきでじんかいを掃き取り、濡れぞうきんで拭いた後、ガラスの破片で板が白くなるまで削るのであるが、作業中、非番兵は上段に腹ばいになり口々にやゆしては高笑い（言葉の意味はわからぬが、雰囲気でそれとなく察しがつく）。二人は流れる悔し涙を拭うこともなく、黙してひたすら板を削る。やっと終わりに近づいたとき、一、二名が大声で何か言い出した。見ると、所々につばを吐き、しみつけて、それをもう一度やり直せと言っているようだ。畜生！ はらわたが煮えくり返るのを何とか抑え、早々に切り上げる。

次は彼らの糧秣受領、三百メートルほどそりを引き、倉庫で麻袋二個を受け取り宿舍の裏にある炊事場へ。当番兵に渡してもとの庭に戻り、休む間もなく大きな

まさかりで炊事や暖房用にまきを割っていたところ、今度は警戒兵が入り口に立ってまた何やらわめいている。そのそぶりからして外套に積もった雪を払えとか。朝から我慢に我慢を強いられてきたが、限度もこれまでと一気に爆発し、持っていたまさかりを振り上げ、

「なにを、生意気な」と堪忍袋の緒が切れ、彼目がけて飛びかかろうとしたとき、彼は脱兎のごとく宿舍に逃げ込む。戦友は「何する寺村」と、私にタツクルして引きとめるのと同時。二人は抱き合い、ともに泣き、我に返るのに時間が必要であった。私の行為はまさに殺人未遂である。

所外作業でのこのような行為は、警戒兵が上司に訴えればラーゲル入門の際引き出され、問答無用で直ちに丸裸にされ屍室にほうり込まれ、一夜のうちに間違いないく凍死、白蟻の運命に終わるのである。作業が終わりラーゲルに着くまでの間、もしそうなったときは、あすからの当作業に対する処遇改善をソ連側に訴えてくれと戦友に重ねて頼む。関門が一步一步近づく。警戒兵はどこにいるのか。戦友が「一番後方にいるぞ」

と耳打ちしてくれる。目はうつろ、足取りも定かでない。一人一人の数を数えられながらやつと通過。戦友が横から抱え支えてくれている。二人はまた涙にむせぶのでした。

解散になり早速元の部隊長に事の次第を報告。部隊長は総隊長（杉野中将閣下）にも報告すべきとして同行され、ご詔勅を今一度肝に銘ぜよとお諭しを受けた次第です。その一週間後、割り当てどおり同作業に従事し、原木運搬から帰って、それから荷降ろし中、肩をたたく者がいる。振り返ると、驚いたことに、その警戒兵は非番であったが、彼ではないか。やはり覚えられていたか。胸は高鳴り息は詰まる。彼は指で来いと先に歩く。仕方なくついて行くと炊事場である。そして戸棚から彼らの昼食であったマカロニ料理一皿を取り出し、これを食べよのしぐさ。さては毒入りか、しかもニタニタ笑っている。一瞬戸惑う。しかし、この二年間餓鬼道に落とされた亡者は、毒でも腹いっぱい食べて死んだら本望とむしゃぶりつく。彼はおいしいかと聞くので、オーチンスクスン（大変おいしい）

と答えると、さらに一皿取り出し食べよと出してくれる。小さくなった胃は、二皿のマカロニに、いかにびつくりもし、満足したことだろう。食べ終わるや、彼は早々にみんなのところへ行けと促す。何食わぬ顔して作業を終え、収容所へ帰り部隊長に報告し、自分の夕食を他に回す。今にして思えば彼は命の恩人と言わべきなのか。二カ月ほどたったとき、古いシガレットケースを差し出し、これとおまえのもの何かと交換しようと言うので、大切に隠していたシャープペンシルを見せると、ハラショーとうれしそうに応じてくれた。

二十二年五月一日、メーデーに塩ニシンを一尾ずつ昼食時与えられ、尾頭つきとみんな我先にとかぶりつく。塩辛さに注意もせず。夜になりどの渴きに耐えられず、警戒兵に見つからぬよう飲んではいけない水道水(ドロウとした水)を手を受けては飲む者後を絶たず。私もその一人であったが、月明かりでも濁っているのがわかり、うがいにとどめ助かりましたが、一週間ほどたつて発熱患者が続出、原因は腸チフスとのこと。所外作業はなく禁足一カ月、体は楽であるが、

いつ自分も熱が出るか、明朝は起きられるか、まさに戦々恐々、生きた心地がしないとはこのことか。抑留されて以来、寝つく前、内ポケットから数珠を取り出し合掌しつつ、正信偈、念仏和讃、お文さんを心であげる習慣であったが、このときほど真剣にお念仏を唱える身にさせられたのは他にはないほどでした。幸い病魔に冒されず禁足が解かれ、六月中旬伐採の所外作業の募集があり、早速応募し、五百人の編成で私は二人仲間と三人で洗濯屋を引き受け、一週間に一回(一日八十人余のシャツ、股下を洗う)、ほかにシラミに困っている人に遠慮せず下着でも別に出してもらい、かまで煮沸退治し、一カ月後には絶滅できたのには皆さんからも大変喜ばれ、忌まわしい抑留生活の中の唯一の平穏なひとときでした。

十月十日午前一時、突然出發命令、集合したのは百名だけ。二日後にもとのエラブカ収容所に到着、十五日に本隊に合流し、約二千人がシベリア鉄道を東へ二十六日かけてナホトカに到着。これで祖国に帰れる、今度は本当に。しかし、二年余の間に先立たれた幾多

の戦友を思うとき、半世紀も生かされていながら、何の報いることもせず、ざんきの念ひとしおです。願わくば、とこしえに世界の平和を祈りつつ筆をおきます。

シベリア抑留の思い出

広島県 田中 工

私は昭和十八年八月に召集令状を受け、小倉重砲第五連隊に入隊しました。これがすべての出発です。小倉には二日ほどいて、直ちに朝鮮經由で満州新京に至りました。そのときは既に物資が不足していたのか、銃もなく丸腰のままでしたし、到着するや、すぐチチハル第七十六部隊に配属を命じられました。総勢十五人で……。

チチハルでは、初年兵教育を三カ月受けました。兵舎は極めてお粗末で、土間の上に屋根がそのまま張ってありました。教育は厳しく、銃の手入れが悪いと言って一時間余りも「捧げ銃」をさせられたり、編み上

げ靴に土がついていたと言って、その土をなめさせられたこともあり、本当につらい三カ月間でした。

初年兵教育が終わると、「幹部候補生の試験を受けろ！」との命を受け、新京に戻り試験を受けパス。幹部候補生教育はハルビンの近くの「阿城」で十カ月、その間一度の外出もなく厳しい教育を受け、見習士官で原隊に帰りました。その後通化へ移り、間もなく敗戦。通化から平壤に移動することになり、鴨緑江を渡って朝鮮に入りました。

鴨緑江を渡るとき拳銃は川の中に投げ捨て、軍刀だけを持って平壤の町を歩いていたら、詰所のようなところから呼びとめられ、軍刀を差し出せと言われました。まだ敗戦気分はなく抵抗していましたら、周囲に大勢の朝鮮の民衆が取り囲み騒ぎ立っていますので、仕方なく軍刀を手離しました。これで何も護身のものはありませんになりました。

平壤郊外の「美祿洞」で天幕生活に入りましたが、ソ連兵が入っていました。この美祿洞で今でも忘れられない鮮烈な出来事がありました。